

高満也・吉永進一・碧海寿広編  
『日本仏教と西洋世界』

法蔵館 二〇二〇年三月刊  
四六六頁 xii+三三三頁 二三〇〇円+税

岡田正彦

日本における近代仏教の動向について、「西洋化」をテーマに考察するコンパクトな論集が刊行された。

一見するとこの時代の日本仏教の動向に詳しくない人にとっては、あまり馴染みのない人物の名前が並んでいる。しかし、本書は「明治仏教」をテーマとする四年間の共同研究の成果であり、少なくとも近代日本の仏教思想に関心を持つ人々にとっては、キーパーソンと言える人たちが紹介されている。また、通読すれば「日本仏教にとって西洋化とは何であったのか」という問いが、本書に掲載されたすべての論文に共有されており、さらには、この問いが「仏教」の枠組みを超えて、「日本の近代とは何であったのか」という大きな問いと接続されていることも感じるだろう。

とはいえ、本書に紹介されている「西洋と対峙した人々」は、各論文を執筆した研究者たちの知的バックグラウンドと深く結びついており、ある意味では恣意的な人物選択であるとの印象は否めない。しかし、本書においては多様な研究分野の

本書は、近代日本における仏教の動向を、西洋化という視点から考察するコンパクトな論集である。本書は、明治時代の日本仏教の動向に詳しくない人にとっては、あまり馴染みのない人物の名前が並んでいる。しかし、本書は「明治仏教」をテーマとする四年間の共同研究の成果であり、少なくとも近代日本の仏教思想に関心を持つ人々にとっては、キーパーソンと言える人たちが紹介されている。また、通読すれば「日本仏教にとって西洋化とは何であったのか」という問いが、本書に掲載されたすべての論文に共有されており、さらには、この問いが「仏教」の枠組みを超えて、「日本の近代とは何であったのか」という大きな問いと接続されていることも感じるだろう。

人々が、共通のテーマのもとでこれまで専門的に研究してきた人物を詳しく紹介することによって、個々の論説の多様性がむしろプラスの効果をもたらしている。無理をしてあまり関心のない人物に取り組むのではなく、各人が詳しく知る人物を個別に論じる形式をとっていることが、本書の魅力の一つだと思う。

各章を担当する執筆者たちは、それぞれ本書に紹介された人たちの専門家であり、短い人物紹介や思想の解説にも、各人の研究の蓄積と議論の深みを感じる。これまで、あまり「近代仏教」の動向に関心を持たなかった人にとっては、近代仏教思想の担い手たちの魅力と議論の面白さに触れる機会になるであろうし、近代日本仏教史を専門とする研究者たちには、新たな研究の可能性を考えるきっかけを与えてくれるのではなかろうか。

本書の構成は、次のとおりである。

はじめに

高満也・碧海寿広

I 伝統と国際化

東陽円月―非公式ハワイ開教僧たちの師匠

菊川一道

前田慧雲―本願寺派宗学と西洋の対峙

内手弘太

II 留学と翻訳

南条文雄―近代仏教学と宗学のはざま

高宣也

高楠順次郎―日本人の近代仏教学

碧海寿広

木村泰賢―大乘仏教のゆくえ

川元恵史

行研究として引用されることはあっても、当人たちの著作が思想史の研究対象として分析されることはあまりない。とはいえ、日本仏教と西洋世界の関係を学術方面から解明していくためには、学説史を思想史や社会史に組み込んで分析していく研究視座は不可欠だろう。このためには、学術的研究機関に属する研究者の学的営為の背景にある政治性や、客観的とされる研究成果にまとい付く歴史性をつねに意識しなくてはならない。近代仏教研究にも、新しい風が吹きつつあると感じた。

「科学との対話」と題して、国外の研究者の論考を紹介した第Ⅲ部では、とくに従来近代仏教研究とは一線を画す提言がなされている。まず、「グローバル宗教史」の視座から「近代科学の意義を先駆的に理解した宗教者」として高地黙雷を紹介する論考は、最も刺激的な問題を提起している。近代自然科学や歴史学の発達をもたらした新しい現実意識のもとで、近代的「宗教」概念が成立するグローバル・プロセスに、高地黙雷（さらには日本の近代仏教）の思想を位置づける著者の提言については、より広い範囲の国際的・学際的研究によって、さらに検証がなされていくべきだろう。また、原担山の生理学的な禅の解釈を同時期の仏教ファンダメンタリストの一人である、福田行誠と対比しつつ論じる次章は、前章で指摘された近代科学と宗教の両立性を主張する際の二つの選択肢（①領域分離、②同一性）を具体的に検証しているように見える。天文学や歴史学の領域で同様の問題意識を共有する評者は、海外から新たな研究視座を提言する、この二人の論考に大きな刺激を受けた。

さらに次章の論文は、加藤弘之と釈雲照の「仏教因果説」論争をもとに、近代における仏教の戒律をめぐる議論を仏教的世界観と近代的自然観の対立に位置づけている。宗教的真理と科学的知識の矛盾を主観的信仰によって克服していく近代的信仰論に対して、「天則」としての因果応報の客観的实在にこだわる釈雲照の態度は、これも近代的自然観のもたらす新たな現実意識に対応する、選択肢の一つであった。

次の章で取り上げられている忽滑谷快天もまた、これまであまり近代仏教の思想潮流に位置づけられていない人物である。しかし、曹洞宗の国際化と近代化に寄与した忽滑谷の足跡は、実際には近代仏教史に大きな影響を及ぼしている。とくに、著者が強調している原担山の生理学的心理学にもとづく新たな禅の技法から、井上円了の催眠術の紹介、精神療法家たちの活動へと連なる系譜を考えるうえで、忽滑谷の生命主義的な仏教論は無視できないだろう。近代仏教と民間精神療法を関連づける研究もまた、これからの展開が期待される分野の一つである。

「普遍の真理の光」について語り、開明的な仏教僧を代表した釈宗演を扱う次章では、普遍の真理という崇高な理念を語る一方で、別の人々には自らの伝統の優越を主張する釈宗演の二面性と彼の主張する「普遍性」の限界が指摘されている。近代仏教研究の難しさの一つは、研究者と研究対象の距離の取り方である。海外の研究者の指摘は、いつも自明化された固定観念を見直す機会を与えてくれる。

「新仏教」の提唱者である中西牛郎を紹介する章は、中西の生涯を丁寧に辿って、近代仏教思想史に彼を位置づける営み自

## Ⅲ 科学との対話

高地黙雷―近代日本の科学と宗教

ハンス・マーティン・クレーマ

原 担山―身理的禅と実践の探究

ステファン・リシヤ／碧海寿広

釈 雲照―戒律復興への見果てぬ夢

龜山光明

IV 普遍性と固有性

釈 宗演―「普遍主義」との戯れ

ミシェル・モール／佐藤清子

中西牛郎―「新仏教」の唱導者

星野靖二

小泉八雲―怪談の近代

大澤絢子

おわりに

碧海寿広

各章には、それぞれ紹介されている人物の略歴や業績が記載されており、あまり背景の知識がなくても議論の内容は理解できる。場合によっては、人物事典的な使い方も可能だろう。また、各章の概略については、本書の冒頭に編者の的確なまとめが記載されている。これ以上の内容紹介は、文字通りの蛇足というべきだろう。このため、ここでは各章の執筆者が強調している、従来の研究には見られない新たな研究視座を特筆しながら、個々の議論を簡潔に紹介したい。

最初の章は、私塾・東陽学寮を通して多くの人材を養成した、東陽円月の活動の意義について、そのハワイ開教の顛末を通して考察している。従来、「日本仏教と西洋」というテーマ

は、海外視察や留学経験をもつエリート僧たちを中心に考えられてきたが、地方の一般寺院を拠点とする人々の活動にもこれからは注目する必要があるだろう。また、各地の私塾の実態調査は、日本仏教の近代化をより具体的に考察するうえで不可欠な研究であり、今後の著者の研究成果に期待したい。

次の章では、同時代の留学経験者や開明的な仏教思想家たちとは一線を画し、江戸期以来の伝統的な宗学を研鑽したうえで「宗学」の近代化を志向した、真宗本願寺派の前田慧雲を題材にして、江戸期に回帰しつつ現代の問題と向き合う本願寺派宗学の言説形成の歴史的過程が考察されている。宗祖や開祖と向き合う宗学や教学のような知的伝統にとっては、一般化した言説をつねに／すでに相対化し、自らの言説の歴史性を意識する姿勢は不可欠であろう。同様の研究姿勢が他宗派や他宗教にも広がっていけば、伝統と近代の相克を超える、新たな信仰のカタチが見えてくるのではなからうか。

近代仏教と宗学の狭間で揺れ動く南条文雄の葛藤と、「日本仏教」のアイデンティティの確立を目指す、「シカゴ万国宗教会議」以降の日本の仏教徒と西洋の近代仏教学との決別を入れ子構造にして描いた次章は、学問の政治性を前景化するとともに興味深い論考であった。翻訳のように厳密な客観性が求められる学知においても、つねに政治的な取捨選択はなされている。しかし、それを意識する人は少ない。言語能力の高い著者のような研究者によって、さらなる知見が蓄積されることを期待したい。

続いて紹介される高橋順次郎と木村泰賢の業績は、通常は先

体に大きな価値がある。キリスト教、仏教、新宗教といったさまざまな宗教と、知的にも実践的にも深くかわりながら信仰の遍歴を重ね、比較宗教学的な感性を維持しながら、多彩な宗教活動にコミットした中西の生涯は、これまで一貫して論じられることはなかった。いつか著者による詳細な人物研究が完成すれば、それ自体が近代日本の宗教思想史に大きく貢献することになるだろう。

小泉八雲の『怪談』を仏教文学として読み解く最終章は、西洋人による日本の仏教的感性の理解を紹介しながら、やはり前近代と近代、ないしは近代的自然観と伝統的世界観の対比が意識されている。ここでの伝統的世界観の背景にある「仏教」は、文化的な認識をもたらすイメージではあるが、ここでも西洋近代と日本の文化伝統としての仏教の影響関係が論じられている。

先にも述べたように、本書に掲載された個々の論文は極めて多種多様であり、個々の専門的な研究領域に踏み込んだ議論は、それぞれが他日まとまった研究成果として発表される可能性を秘めている。今回は、日本仏教の「西洋化」というテーマのもとで一冊の論集にまとめられているが、いつかそれぞれの執筆者が提言している新たな議論を発展させて、さらに近代仏教研究を活性化してもらいたいものである。

また、「西洋化」のような広いテーマについて、近代仏教に関連する留学や外遊経験者、来日した外国人などの残した足跡や著作、社会・文化活動などを通して考察する営みは、たとえ

その領域を仏教に関連する活動や言説に限定したとしても、そのすそ野は極めて広くなるだろう。本書で紹介されている人物たちは、かなり広い領域をカバーしているが、決してそのすべてが網羅されていないことは、編者たちにも理解されているはずだ。

野に咲く名もない花にも注目すれば、近代仏教の沃野の調査は際限がない。しかし、際限がないからこそ、これからも多彩な分野の人々に眼差しを向け、新たな知見を産出し続けることが可能なのである。

本書の書評を引き受けたあとで、編者の一人である吉永進一氏の計報に接した。本書に見られるような、近代仏教研究の新しい動向と国際的な広がりは、これまでの故人の奮闘を抜きにしては語りえない。その学恩に應えるためにも、さらに近代仏教研究のすそ野を広げる営みに、取り組んでいきたいものである。

繁田真爾著

『「悪」と統治の日本近代』

——道徳・宗教・監獄教誨——

法蔵館 二〇一九年七月刊

A5判 vii+三六一+七頁 五〇〇〇円+税

小幡 尚

繁田真爾『「悪」と統治の日本近代——道徳・宗教・監獄教誨』（法蔵館、二〇一九年）は、その速大なタイトルに示されているように、壮大な構想と大胆な展望の下に著された歴史書である。

評者が同書に大きな関心を抱いたのは、監獄教誨を取り上げている点に注目したためであった。「刑務所で受刑者に対して行う徳性の育成を目的とする教育活動」（「教誨」（『広辞苑』）である監獄教誨の歴史に関する研究はまだまだ蓄積が薄い。監獄教誨、とくにその黎明期について詳細な検討を加えていること自体に大きな意味があるう。

サブタイトルに示されているように、同書では道徳・宗教・監獄教誨という三つの事象が扱われている。監獄教誨について、それをより高次元で支える道徳・宗教までも視野にいれて討究すればどのような歴史像が立ち現れてくるのだろうか、読み始める前から楽しみであった。もちろん、同書の主題はそこに止まるものではない。三つの事象を検討することによって

統治そのものを問うているのである。このような気宇壮大な同書の内容を評することが評者の手に余るものであることは十分に自覚しているが、蛮勇をふるって挑んでみたいと思う。

まず簡単に同書の内容と構成について紹介しておこう。序章において、同書の「まず取り組みたい課題」が、「近代日本の統治権力はどのように形成され、それはどのような内実や特徴をもつものだったのか」という問題を、国民道徳（イデオロギ―）や刑罰システム（実践）の歴史を通して検討すること」（五頁）だと示される。検討の対象となっているのは、「明治初年から一九二〇世紀転換期までの、およそ半世紀」、「ほぼ明治時代全体」（四頁）である。

同書の本文は、副題に挙げられている道徳・宗教・監獄教誨のそれぞれを扱った三部から構成されている。すなわち、「第一部 創られた規範——国民道徳の形成」「第二部 「悪」と宗教——清沢満之を中心に」「第三部 刑罰と宗教——監獄教誨の歴史」である。

I部は「第一章 近代日本における国民道徳論の形成過程——明治期の井上哲次郎にみる——」「第二章 一九〇〇年前後日本における国民道徳論のイデオロギ―構造——井上哲次郎と二つの『教育と宗教』論争にみる——」から成る。

一章では、「近代の歴史的産物である国民道徳が、近代日本の統治イデオロギ―としてどのように形成されたのか、その過程や歴史的条件について、とくに明治期における井上哲次郎の実践や経歴を手がかりに」（四三頁）検討される。その結果、「立憲制確立期」「日清・日露戦争期」「日露戦後から明治末

年」の三期に区分」した上で、「井上国民道徳論の変容過程」(四一頁)が明らかにされ、「国体論」が日露戦後に前景化してきたこと(同前)が強調される。

二章では、「一九〇〇年前後に思想界で広く行なわれた『教育と宗教』をめぐる論争を取り上げ(八六頁)、一八九二年以降の一〇年間にわたる「井上の国民道徳論がたどった道」を確認し、井上が「イデオロギーの強制だけではなく同意形成も重視して国民道徳論を展開した」(一〇六一―一〇七頁)態様を描いた。

「近代日本で『悪』への共感的な態度、あるいはそれを可能にした思想はどのような内実のもので、それはそもそもどのようなようにして生まれてきたのだろうか(一一八頁)」という問いを掲げ、清沢満之について検討したII部は、「第三章 日清戦争前後の真宗大谷派教団と『革新運動』—清沢満之『精神主義』の起原—」と「第四章 清沢満之『精神主義』再考—明治後半期の社会と『悪人の宗教』—」の二つの章から成る。

三章では、「ふつう内面主義だと批判される清沢『精神主義』の起原を、それとは一見正反對の外向的な『革新運動』のなかに求め、そこから次第に『精神』論的立場を強めていくプロセス」(二四七頁)を詳細に描いている。

四章では、「精神主義」にいたる清沢の思想が「内面主義ではなく、むしろ明治二〇―三〇年代の歴史的现实との格闘のなかで、その現実への批判をより原理的に遂行しようとした清沢が自ら選びとっていった、それなりに一貫した論理をもつひとつの積極的立場であった」(二五八頁)ことを明らかにして

いる。

「監獄教誨」が近代日本でどのように誕生し、その後どのような歴史過程をたどったのか、詳しく検討(二九〇頁)したIII部は、「第五章 『監獄教誨』の誕生—明治一〇・二〇年代における刑罰と宗教—」「第六章 異端的教誨師と囚人たち—明治三〇年代における『清沢的契機』—」から構成されている。

五章では、これまで通説的に考えられてきた「監獄教誨が真宗によつて—から創始されたという理解」(一九六頁)について再考し、「明治二〇年代前半までの監獄教誨は、教誨師たちがその宗教的信念に基づいて、ある程度自由な教誨活動を行ないうる余地や可能性がまだ広く存在して」(二五二頁)おり、その時期にはキリスト教の教誨師が同事業を主に担っていたことを明らかにしている。

六章は、「一九〇〇年前後から、一部の教誨師たちのあいだで『悪』を共感的に、あるいは内在的にみつめようとする眼が生まれてくる」(二六八頁)動向を詳しく論じ、それが「監獄教誨の歴史にとって決定的といってよい変化」(三二二頁)であったと位置付けている。

同書が扱っている歴史的事象の多くは、これまでの研究で十分に取り上げられてこなかったものである。それらに光りを当て新たな評価を与えていることが同書の魅力である。そして、それらの見解は、今後の研究に裨益するところ大であろう。しかし、各章の最後におかれた議論などを読むことによって、そこに至るまでに論証されてきた事象に対する理解に揺らぎを感じるが多々あった。

同書を読んでいる際にしばしば感じたのは飛躍感とでもいべき感覚である。歴史的事象の分析から、抽象度の高い「大きな議論」へと展開し、さらに大きな問題を提起する、という構造の記述が多く見られる。その議論の広がり、同書の構想の壮大さを示すものであり、読者にとつてたいへんに刺激的である。ただし、その飛躍に読者がついていけないのかという点については疑問である。提示される問題提起とそれまでに展開された議論とが十分に架橋されているように思えないのである。

そのような点も含め、以下、同書の中で展開されている議論に対する疑問などについて述べたい。

I部を読んでいて捉えにくさを感じたのが、国民道徳論と国民道徳の関係である。すでに述べたように、I部の二つの章で主に検討されるのは、井上哲次郎の国民道徳論である。しかし、部のタイトルに用いられているのは国民道徳であり、全体としてはその形成が論じられている。井上が、国民道徳論の代表的イデオログだったとしても、その「論」と国民道徳はイコールではない。それを結ぶ説明が評者には見出せなかった。

また、「国民道徳は、近代日本において広範な人々をその内面から規律することをめざして創出された諸徳目」であり、「共同愛国」や「忠孝悌信」などがその中心的徳目として推奨された(一章冒頭、四三頁)といった説明は繰り返されているものの、自明であるためか、国民道徳の徳目それ自体に関する説明に多くの言葉は費やされていない。

さらに、I部以外の箇所にある井上の議論についての説明に当惑した。第四章では「臣民としての『善』の実践をただ形式

的に命令する井上『国民道徳』論(二七二頁)、「井上哲次郎の哲学は、それが現実の社会に向けられても、『国民道徳』という形式的な規範、あるいは『倫理的宗教』という常識的な道徳論しか生み出さなかった」(二七八頁)とされ、井上の国民道徳論はあくまで形式的なものに止まったという見解が示されている。I部での検討との整合性を考え、混乱を覚えた。

II部四章における「一九〇〇年前後のこうした道徳論の隆盛」(二六九頁)についての説明に関して釈然としない思いを強く抱いた。著者は、その説明にデヴィッド・ハーヴェイ(渡辺治監訳)『新自由主義—その歴史的展開と現在』(作品社、二〇〇七年)を援用している。タイトルから分かるように、この書は「現代資本主義—新自由主義を対象に論じ」(一七〇頁)るものである。その議論を「歴史的に敷衍して考えて」(同前)、一九〇〇年頃の日本の事象についての説明に用いている。同時期の日本に関する研究は枚挙にいとまがない。なぜ、それらを用いずに、検討の対象とする時期が大きく異なり、日本を対象としない研究に依拠して立論する必要があるのか。この個所のすぐ後において著者は「道徳もまた特殊歴史的名のものであるという事実」(同前)を述べている。このような見解と、先述の姿勢とは矛盾しているのではないだろうか。

また、同じ章において、「清沢哲学の歴史的意味を理解するためにとりわけ重要だと思ふのは、『資本主義化する生活世界』と『一般化する国家理性』という、清沢が生きた明治中期のあらゆる生や思想をもっとも大枠で規定した、二つの歴史的条件」(二六一頁)であるとした上で、前者について説明してい

る。その際に依拠されているのは、大石嘉一郎編「日本産業革命の研究——確立期日本資本主義の再生産構造(上・下)」(東京大学出版会、一九七五年)のみである。大石編書に依拠すること自体に異論はないが、なぜそれ以降に大きく進展した明治期の社会や経済に関する研究の成果を利用しないのか疑問を感じた。同書では、「複雑で豊かな可能性に満ちているはずの歴史的世界」(二五五頁)などの文言を用いて、歴史の複雑さを強く認識すべきであることが繰り返して強調されている。しかし、主題として検討している事象の背景にある明治期の社会の歴史については、一般的な説明に終始したり、時代の異なる研究に依拠した説明がなされたりしているのである。

Ⅲ部を中心に、明治期の監獄教誨において「通俗道徳」から「国民道徳」への変化」が起り、「浄土真宗の教誨師たちによる国民道徳の教誨というスタイルが、近代日本の監獄教誨の基本線として、次第に定着」(二七一頁)していったことを著者は繰り返して述べている。これは重要な指摘である。しかし、この見解について首肯できるとは言い難い。

いうまでもなく、「囚人」(収容者)は有罪判決を受けた犯罪者である。彼らを教化する場合、その目標は「再犯を防ぐ」とに置かれるのが自然である。つまり、必ずしも「よい国民」とすることを目指す必要はなく、「罪を犯さないで社会生活を営むことができる人」になれば十分だ、という考えもあり得る。

同書では「善き国民に矯正していく『悔過遷善』をめざした監獄教誨」(三二六頁)という表現が使われている。「まっとう

ない。著者自身が、「統治のおよぶ場はもちろん監獄に限らず、その統治技術の広範な汎用性も、近代的統治の特徴である(軍隊、監獄、学校、工場、病院における規律訓練など)」(八頁)と説明している通りである。軍隊・監獄・学校などの中から監獄を選び、さらに監獄内で行われる諸業務のうち教誨について検討することの意義について詳しく説明すべきだったのではないか。

この点についての説明なしに、「本研究で検討したい」のは「近代日本における『統治』という経験についての全体像である」(六頁)、「明治二〇年代半ば以降」に教誨が「囚徒たちの主体の矯正を主眼とする教誨へと大きく変容していった」(歴史過程こそ、近代的統治の形成過程そのもの)(二二六―二七頁)である、などとする議論の展開について行くことは難しい。

また、同書でいう近代的統治そのものの定義がやや曖昧であるように感じた。近代的統治という言葉を用いた際にわれわれが考へるのは、近代国家全般にみられる統治のあり方だろう。明治期日本を対象とする同書で近代的な統治について論じる場合には、そのような近代国家全般に共通するあり方と近代日本における統治の特徴と時期的な相違などについて明確に区別して論じる必要があるだろう。

著者が「近代的統治の本質や限界点」(二六九頁)について真摯に検討していることは疑いようがないが、先に挙げた差異についての説明が薄いこと、政策や施策という次元ではなく統治という概念を用いて分析していることから、結果的に歴史的な変遷を感じにくい一般的な説明に陥ってしまったのでは

な人間」(三二二頁)にすることを指すことと、「善き国民」を目指すことは区別して考える必要がある。同書の説明では、この区別が十全にはなされていない。

さらに残念なことは、「国民道徳の教誨」の具体例が紹介されておらず、実際にどのように国民道徳が説かれていたのかが不分明なことである。これについて具体的に説くべきではなかったか。

書名に明示されているように、同書の分析対象としてもっとも重要なものが「統治」である。同書を読み解く際、著者がこの点についてどのように考えているのかを知ることは重要であろう。同書全体を通じた論点として、この点について考えてみたい。

既に紹介したように、同書は「近代日本の統治権力」の形成・内実、その特徴などの問題を、「国民道徳(イデオロギ)や刑罰システム(実践)の歴史を通して検討すること」を課題として提示している。

まず、同書が詳細に検討している監獄教誨は、近代的統治の中でどのような位置を占めるものなのかという問題がある。この点の説明にはかなりの揺らぎが見られる。監獄教誨は、「統治権力(国家)と『悪』、あるいは刑罰と宗教などをめぐる重要な問題系」(一九〇頁)であることは首肯できる。しかし、「国民道徳と監獄教誨という近代的統治の中心を担った二つの主題」(二二頁)などのように、近代的統治の中で監獄教誨が非常に大きな位置を占めているとする説明について納得することは難しい。監獄だけが統治の場でないことは言うまでも

ないか。

もう一つ、「国家は近代的統治の原則を変更しなかった」(二六八頁)と述べていることに対して強い違和感を覚えた。「原則を変更」する主体は何なのだろうか。それは意図的に変更することが可能なものなのだろうか。「国家が近代的統治の原則を変更する」ということが具体的にどのような事態を指しているのか、評者には想定することができなかった。

最後に、同書の末尾近くに置かれた「積極的な主張」(一一頁)について触れたい。著者は、このように述べている(三三三頁)。

そして本書の結論として強調しておきたいもう一つが、「自己の統治」の実践は、そのような近代的統治に対抗しうる有望な実践として理解することができるのではないかと、ということである。

さらに、「自己の統治」なきところでは、近代社会に生きる主体は容易に他者による統治に包摂されてしまう」(三三五頁)とも述べる(一一頁)にもほぼ同文がある。こちらでは末尾が「巻き込まれてしまう」となっている。

この結論について、困惑を禁じ得ない。それが有効かどうかはともかく、「自己の統治」という概念を分析の手段として使用することは理解できる。しかし、ここに述べられていることは歴史研究の枠を越えた「教訓の一種」になってしまっているのではないだろうか。また、同書の分析がなくてもこのような結論に至ることは可能なのではないか。

ここまで同書の議論に関して評者がどのような困惑を抱いた

のかということも多く述べてきた。無論、その原因が評者の教養が余りに不足していること、あるいは同書の議論のレベルが評者の能力の限界を越えていることにある可能性も十分に考えられる。そのため、それらを「誤り」と評することはできない。しかし、史的事象の分析から大きな議論への飛躍の間が埋められていないことは指摘できると考える。同書でなされた史的事象の分析と、飛躍的な結論の間を架橋する論証をもっと詳しく提示してほしいと考える読者は評者だけではないはずである。

同書に示された著者の議論が、既存の学問分野に収まりきらないものであるということも十分あり得るし、そのように主張することも可能であろう。もしそうであるとしても、このような主張に至る過程についての説明が必要であることに変わりはないだろう。

著者は今後、同書で高く掲げたさまざまなテーマを深化させ、さらに大きな構想の下に新たな研究を進めていくことだろう。その成果に接することを一読者として楽しみにしている。